

本能

liliput / aliliput

気紛れを許して

(椎名林檎『本能』)

完全防寒装備が仇になった。先程軽くシャワーを浴びた所為で寒いと思ったのである。失敗した。この夜空の下マフラーにぐるぐる巻きにされた私の首筋は、もう11月も終わると言うのに薄く汗をかきはじめていた。私はブロック塀に挟まれた、ちらりちらりと星の瞬く夜空を仰いでどうしようかと途方に暮れた。

しかし今更家に戻る訳には行かない。

「どうしました？」

不意に後ろから声を掛けられた。

声の主は長身の青年である。ジャケットにマフラーの、私よりはいくらか軽装な身体に項を覆うくらいの髪を無造作に生やした頭が、細い眼鏡の向うで微笑んでいる。

「確か……滝沢さんでしたね？」

青年はそう訊いた。私は舌がもつれて返事が上手く口から出てこないの、代わりにこくこくと頷いた。

「貴方は……狛さん？」

私はようやく青年の名前を思い出した。一週間ほど前に近所に越してきた人だ。家に挨拶回りに来た時に、名刺をくれた筈である。

名刺には『狛 輪鼓 職業：探偵』——とあった。

「滝沢さん、どうしたんですこんな時間に？ もう8時を超えますよ。」

狛は腕時計に目をやった。成程、大して寒くも無い晩秋の夜空の下を大層な防寒装備をしてうろついている四十男なんて、探偵にとっては胡散臭さの塊に見えるに違いない。私は何と説明したものか解らなかった。

「え、ええと——そういう狛さんこそ何を？」

「僕はペットの散歩です。ほら、イユクス！」

狛は空中に声を掛けた。するとばさばさと大きな羽音がして夜の闇がずずうと鳥の形をとり、やがて一羽の鴉になって狛の肩に止まった。

鴉は胡散くさげに私を見ると、一声かあと鳴いた。

「それで滝沢さんはどうなされたんです？」

私ははっと我に返った。

「あ、ああ、そうなんです、聞いて下さい。大変な事が――」

私の営んでいる下宿に布施 里美が引っ越してきたのは2日前である。近くの某女子大学一年生で、快活で可愛らしい感じのお嬢さんであった。

その里美が今、首を食い千切られて死んでいるのである。

「食い千切られて？」

猫は怪訝そうに訊いた。

「ええ、間違いありません。だってやったのは一家の八房なんです。」

私は目を伏せて答えた。八房の口が血にまみれていたのである。

八房は私の家で飼っている犬である。種類は良く解らないが、日本犬の雑種だそうだ。身体が人間の小学生くらいある大きな賢い犬であった。

その八房も今また里美の横で、身体を滅多刺しにされて息絶えている。

「・・・その一一里美さんと八房は、今里美さんの部屋に？」

「ええ、両方とも彼女の部屋で死んでいます。」

室内は惨状を呈していた。引越しの片付けも十分に済んでいないワンルームの部屋は凄まじい格闘の所為だろう、物が散乱した床の中央で里美が苦悶の表情を遺していた。

「八房は一一そんな凶暴な犬だったんですか？」

「いえ、大きいからそれなりに力は強かったし、私にこそなつきませんでした。割合人好きのする、むしろ大人しい犬でした。それに里美さんに始めて会った時も八房の方からじゃれついていったくらいで、里美さんも犬が好きとの事で丁度良かった・・・と思っていたのですが・・・。」

私は改めて事態の異常さに気づき言葉を詰まらせた。

猫は顎に手を当てて軽く首をかしげ考え込む態勢を取った。

「八房を殺した人物の事も考えなければなりませんねえ……里美さんが誰かの怨みをかっていた、という様子はありませんでしたか？」

「いえ、何分つい最近越してきたばかりですから……心当たりはありません。」

「何でも構いませんよ、家族関係などでは？」

「は、家族……里美さんには御両親がいらっしゃるし、家族と言えるような人は思い当たりませんが。」

「御両親がいらっしゃる？」

「ええ、叔母夫婦と暮らしていたとかで。」

私は知っている限りの里美の身の上を説明にかかった。里美には父がなく母と二人で暮らしていたが、二年前にその母が里美をおいて不倫関係にあった既婚男性の下へ走ってしまったのである。気の毒な里美はその後叔母夫婦に預けられたのだそうだ。

「それで、里美さんのお母様は今何処に？」

「さあ、知りません。行方知れずになってしまって。」

「相手の男性も結婚していらっしゃるんですよね、その方の奥様は？」

「さあ、それも……やはり何処かへ行ってしまったようですが。」

「うーん……。」

粕は首を反対方向に傾げた。

「事件を見つけられたのは何時頃ですか？」

「ええと・・・買い物から帰ってきた後ですから、夕方の六時くらいです。専門家でないので良く解りませんが・・・
・そんなに時間が経っている様ではありませんでした。」

「誰か室内に侵入した形跡はありませんでしたか？」

「何しろめちゃくちゃだったので・・・でも窓は全て鍵を掛けてありました。」

「扉は？」

「それには鍵がかかっていませんでした。里美さんは何処かへ出かけようとしていたみたいでした。」

私は里美がマフラーをしていた事を説明した。大方八房と共に散歩でもするつもりだったのだろう。

「じゃあそこから誰か部屋に入ったかもしれませんね・・・イユクス、聞き込みに行ってきてくれないか？」

イユクスはかあと一声鳴くと、再びばさと鷹揚な羽音を立てて夜に還っていった。私は少し面食らった。猫は済ました顔で質問を続けた。

「他に下宿している方や滝沢さんの御家族など、他に異変に気付いた方はいらっしゃらなかったんですか？」

「他の下宿人はその時出払ってしまっていましたし、私には家族はいません。」

「でも八房は元々貴方が飼っていた犬ではないんでしょう？」

凶星だ。私はぎくりとした。

「どうして解ったんですか？」

「貴方があまり八房の事を好きではない様だから。」

猫は微笑んでみせた。私の今迄の八房についての口調から読み取ったのであろう、流石探偵である。私は以前に離婚した妻が飼っていた犬である事を告げた。妻には大変なついていたのである。

「八房は——意味もなく人を襲うような、そんな犬ではなかったんですね？」

狛はもう一度質問を繰り返した。

「はい、兎に角賢くて大人しい絵に画いたような忠犬で、理由もなく人を噛むなんてとても——考えられません。」

「うーん……。」

狛は傾げていた首を正位置に戻した。その時上空でばさばさと羽音がして、再び闇が鴉の形になって狛の肩に戻ってきた。

「お帰り、どうだった？」

かあかあとイユクスが鳴き、狛はそれに一々面白そうに頷いて、そして私に向かってにっこりと微笑んでみせた。

「里美さんが自室へ戻ったのが午後4時、それ以降の訪問客はいなかったようです。また貴方のおっしゃる通り他の下宿人は全員今日一日自室にいらっしゃらなかったみたいですね。」

そして狛は腕を組みなおした。

「貴方も嘘をついていらっしゃらないようですし、これで大体解りました。」

「嘘をついていないって……。」

狛は人の心の中まで見通せるのか？ 私は驚きを通り越して空恐ろしくなってきた。狛はうふふ、と人差し指を軽く下唇に当てて笑みを浮べた。

「僕には解っちゃうんですよ。」

挑戦状

「ここで謹んで読者の注意を喚起する」

- ・これは明確な殺意を持った犯人によって計画された殺人である。
- ・地の文、及び狛の台詞は全て真実である。また、狛は犯人ではない。
- ・犯人は問題文中に登場している。
- ・三人以上の共犯はこれを認めない。

皆様に答えて頂くのはWhoとHowです。今回はWhyを考えた方が解り易いかもしれません。また椎名林檎及び彼女の曲『本能』はBGMに使っただけであり、当問題には何の関係もないことを申し上げます。

そうそう、ヒント。これは「本格的言葉尻捕らえ系」ミステリです。
それでは、奮って御回答下さいませ。

「終わりにはどうせ独りだし」

(椎名林檎『本能』)

「まず犯人から行きましょうか。犯人は――」
狛は笑顔を崩さないまま言葉を続けた。

「滝沢さん、貴方の別れた奥様です。」

「は……。」

私は開いた口が塞がらなかった。

「……狛さん、何を言っているんですか？ 私は妻とは2年も前に別れているんですよ。」

どうして里美さんに関係があるんです、と言い終わるのを最後まで聞いて、狛はゆっくりと顎を撫でながら口を開いた。
「失礼ですがその離婚の理由は、貴方の浮気なんでしょう？ 布施さんとの。」

「……」

私は驚きに目を見張った。狛はそんな私の様子を眺め面白くてたまらない、といった様子で忍び笑いを洩らした。

「最初からお話しましょうか、まず貴方の浮気相手は布施さん——正確に言えば里美さんのお母様です。」

布施さんのお母様は不倫関係にあった男性の下に走った——とおっしゃいましたよね、と狛は聞き苦しい事を眉一つ動かさずすらすらと言ったのけた。しかし不思議に何の反感も起こらない。

「貴方がまだ知り合って数日足らずの、しかも若い女性である里美さんの事を『里美さん』と名前で呼ばれるのがどうも気になったんですよ。普通『布施さん』ですよ。それで貴方が以前『布施』という名字の人、そして恐らくは里美さんと近い関係にある人と関係があったんじゃないか——と思ったんです。」

無意識が勝手に二人を区別していたようですね——と狛はくすくす笑った。

「それに里美さんの家庭の事情に妙に精通していらっしゃるのも気になりました。まあ里美さんの叔母様辺りが噂好きなら里美さん自身の事情には詳くなれるでしょうが、不倫相手の家庭の事情まで知りませんよ、普通。」

背筋は冷たくなっているのに、首筋の汗が多くなるのが解った。

「それから八房です。そんな忠犬が奥様に大変なついていらっしゃったのなら、どうして奥様は八房を連れて家を出なかったんでしょう？ 例え奥様側の事情で飼えなかったから置いて出たのだとしても、犬なんて忠義な生物ですから自分から飼い主についていく筈です。これは奥様御自身が、八房に家に残る様よくよく言い含めていたとしか思えません。では何故？」

狛は大仰な身振りで肩を竦め天を仰いでみせた。どう考えても人の事情を弄んでいるとしか思えない。しかしやはり腹は立たない。それは

「貴方はとうにお気付きの筈ですが？」

狛は一気に視線を私に向けた。

私の息が詰まった。

私は狛が恐ろしいのである。

狛は十分な時間を取って私の様子を観察した後、ようやく蛙を開放する蛇のように首を横に向けて言葉を継いだ。

「自分の夫が不倫をしている事を知った奥様は、その相手に復讐しようと考えた。しかし自分が直接手を下すと重い罪に問われて厄介だから、犬である八房にさせる事にしたんです。それなら大した罪にもならないし、第一その場合刑法の手が伸びるのは飼い主である貴方だ。一石二鳥だと思った。だから」

狛は天を仰いだ。その時、今迄雲に隠されていた月が銀の顔を覗かせた。

「八房に復讐を教えたんです。」

狛の白い顔が月の光の所為で青ざめて見える。狛は首を元の位置に戻した。

「不倫相手の臭いのするもの——不倫はそれなりに長い期間だったから手に入れるのに事欠かなかった筈です——を使って八房に、この臭いのする人間を噛み殺すよう教えて自分は家を出る。勿論貴方からも相手の臭いはしたでしょうが、賢い犬です、奥様の意図を読み取り指示を完璧に守った。

里美さんが八房の前に現れる事は奥様の誤算でした。恐らく奥様は相手に子供がいる事すらご存知なかったと思います。」

これは憶測ですが、と狛は付け足した。

「そして里美さんが現れると、微かに里美さんからした標的の臭いに八房はひかれて、より正確な識別の為標的に——じゃれつく。端から見れば愛想のいい犬がふざけかかっているようにしか見えません。さらに不運なことに里美さんのマフラーはお母様のものでした。自分を捨てた母親とは言えやはり親は親ですから、形見に大事にしていたのでしょう。」

可哀相に、優しい娘心が仇になりましたねと、狛はちっとも可哀相じゃなさそうな様子で白々しく目を伏せ首を振ってみせた。

「どうやらお母様の方は八房と顔を合わせる事もなく別れてしまったようですから、里美さんは完全な身代わりとして殺されてしまったのです。首を噛まれていたのは、お母様の匂いの染み付いたマフラーの所為です。」

私は汗を吸い首に貼りついているマフラーを引きちぎってしまいたい衝動にかられた。

「以上、全て貴方の言葉から推測致しました。貴方が先程『里美さんに怨みを持つ人物には心当たりが無い』と言って下さった事で、返って解り易くなりました。確かに貴方は里美さんのお母様に対して怨みを持つ人物の心当たりはあっても、里美さん本人に対してでは心当たりのある筈もありませんからね。」

そして狛は顔を上げて私を見た。

「そして、八房を殺したのは貴方ですね？」

もう驚くまい、どうせ端から見通されていたのだろう。私は観念する事にした。

「そうです、買い物から戻ったら、里美さんの部屋で八房の唸り声と何かを引きずるような音がしたものですから……私は、台所にあった包丁を持ち出して」

八房を殺しましたと、語尾を吐き出した。

「狛さんのおっしゃる通りです。私は――まさか本当に実行されるとは思っていませんでしたが――妻が八房を残した意図も、里美さんが殺された原因も解っていました。でも事情が事情ですから――警察に何と説明したらいいのか、解らなくて。」

正直に話せば必ず誰かが殺人罪に問われる事になる。

「それで貴方は取り敢えず血で汚れた体を洗う為にシャワーを浴びて、表に出る事にしたんですね。」

「気の利いた嘘が咄嗟につけるほど私は器用な人間ではありません。でもぺらぺらと警察に真実を馬鹿正直に話せるほど世間知らずでもありません。こんな事件が発生したにも関わらず、警察に連絡もせずにシャワーを浴びて二時間も表で途方に暮れている大家なんて……さぞかし怪しいと思われたでしょうね。」

私は思わず自嘲の笑みを洩らした。

「大当たりです。」

猫は臆面もなく肯定した。

「貴方が主犯でないことは、実行犯が八房だったので判りました。八房は貴方になつていないし、第一自分を殺すような飼い主に協力するほどにはお利口さんな犬ではないようですから。」

そして猫は唐突に踵を返した。

「さ、行きましょう。」

「……何処へ？」

ぽかんとしている私の前に、月の光を浴びて白い猫の手が差し出された。

「警察ですよ。」

当たり前だと言わんばかりの口調で私を促す。尚も動かない私に畳み掛けるように囁いた。

「大丈夫、悪い様にはしませんよ。」

仕方ない、私はついていく事にした。猫はもう後ろを振り返らずに元来た方へ歩き出した。肩の鴉はその間寸毫も身動きしなかった。

—————終劇。